

痛み駆動双数妬み理論の再現性に関する検討

—日本人の大学生を対象にしたオンライン調査を通じて—

澤田 匡人・鈴木 雅之・山本 卓

Ample research on envy is beginning to elucidate its characteristics, as well as its discordant views of the emotion. A recent meta-analytic research attempted to rectify this issue by distinguishing the currently discussed theories—Malicious Envy Theory, Dual Envy Theory, and Pain Theory of Envy—and empirically proposed a composite theory that comprehensively integrated the incongruous conceptualizations: the Pain-driven Dual Envy (PaDE) Theory (Lange, Weidman, & Crusius, 2018b). Investigating its pertinence to Asian cultures would strengthen its practicality, and we therefore replicated and extended a study from this pioneering article among 122 female Japanese undergraduates. Specifically, we employed structural equation modeling to identify which of the 4 data-driven models best fits the data obtained from participants' recalled state envy. Results supported the PaDE model suggesting its potential applicability among the Japanese population. Strong relations between PaDE and dispositional envy further validated this finding, albeit with the exception of dispositional benign envy and pain which thereby opens new avenues for future investigation. Nonetheless, extended statistical support for the recently proposed theory added to its external validity.

Keywords: pain of envy, benign envy, malicious envy, pain-driven dual envy, Japanese

私たちは、自分の幸せだけではなく、他者の幸せにも関心を寄せる。自分も他者もおしなべて幸せであるなら問題は生じないかもしれないが、現実はその単純なものではない。とりわけ、日本人の場合、幸せには「人並み」である感覚が伴われる (Hitokoto & Uchida, 2015)。そのため、人並みから外れた幸せはリスクにもなりえる。たとえば、日本人の大学生から幸福から連想する言葉を収集すると、中には「幸せになると他者から妬まれる」という回答もみられたという (Uchida & Kitayama, 2009)。人並みであるという感覚を伴わない (もしくは、伴わないと思われる) 幸せは、内集団におけ

る「自分」の協調的な立場を損ない、潜在的な関係への懸念を生じさせてしまう (Hitokoto & Sawada, 2016)。

こうした幸せに邪な眼差しを向ける側が抱く感情、すなわち、他者の幸せや成功を見聞きしたときに生じるネガティブな感情は妬み (envy) と呼ばれる。キリスト教における妬みは、諸悪の根源たる「7つの大罪」の1つに数えられ、「全身に広がる毒」や「跳ね返る矢」とみなされてきた (Schimmel, 1993)。また、犯罪 (Schoeck, 1969)、精神病理 (Gold, 1996)、いじめ (土居・渡部, 1995) などのネガティブな現象とも密接に関連した感情として論じられることが多い。さらには、妬みを妬みとして自覚できないまま、別の感情へと偽装もしくは転成を遂げるとの指摘もある (Smith, 2013 澤田訳 2018; Wert & Salovey, 2004)。妬みはあくまで、当該の他者の幸せを「ずるい」という感覚、すなわち主観的な不公正感に基づくものである以上、周囲からは受け入れられにくい。そのため、妬んでいる当人は、当該の感情を妬みではなく義憤や怒りといった、より社会的に是認されやすい感情と認識して、その矛先を他者に向けるというのだ。たしかに、妬みにはこのような特徴があるからこそ、私たちは妬みに突き動かされて人を攻撃すると同時に、そうした結果をもたらす妬みの標的になることを恐れているのかもしれない。

妬みは、誰かを傷つけるような帰結だけではなく、時に「諦め」のようなパフォーマンスの停滞をもたらすことも知られている (Duffy, Shaw, & Schaubroeck, 2008; Hill, DelPriore, & Vaughan, 2011; 澤田・新井, 2002)。たとえば、澤田・新井 (2002) は、小中学生が経験する妬みからは、破壊的関与のような攻撃行動だけではなく、積極的に行動を起こさない対処 (意図的回避)、すなわち、諦めに類した行動も産み出される場合があることを見出している。Hill et al. (2011) も、妬みが諦めを促進する点を明らかにしている。彼女らの実験では、妬みを喚起させるような人物、もしくはニュートラルな人物のインタビューのいずれかが呈示され、インタビューに登場した人物の名前に関する質問への回答を求められた。その後、極端に難しいアナグラムに費やした時間が測定されたところ、事前に妬ましい人物の名前を正確に言い当てられた者は、アナグラムに取り組む時間が短くなっていた。この結果は、妬みに関連した記憶が、思慮を要する作業に対する意欲を低めることを示唆するもので、組織の中で生じる妬みがパフォーマンスを悪化させるとの指摘 (Duffy et al., 2008) とも矛盾しない。

このように、これまでの研究では、妬みが種々のネガティブな帰結をもたらすという見解が大勢を占めていた。しかし近年では、妬みのポジティブな側面にも光が当てられるようになった (Lange & Crusius, 2015; 澤田, 2010; 上野・陶山・小塩, 2018; Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters, 2009, 2011)。そもそも英語では「envy」のみで表される妬みも、日本語では「妬み」と「羨み」、オランダ語では「afgunst (malicious envy: 悪性妬み)」と「benijden (benign envy: 良性妬み)」と称され、両者には別々の意味合

いがある¹。オランダ人を対象としたVan de Ven et al. (2011)は、悪性妬みと良性妬みに分けられる妬みを取り上げて、それらを経験した者の作業に及ぼす影響を検証している。実験参加者は、架空の大学生についてのストーリーを読んでから、良性妬み、悪性妬み、感心 (admiration) のいずれかの感情を経験した程度を評定するように求められた。続いて、実験参加者に拡散的思考を要する遠隔連想検査 (Remote Associates Test: McFarlin & Blascovich, 1984) が課せられると、良性妬み条件に割り当てられた学生が最も長く課題に取り組んでいただけでなく、成績も良好であった。また、特性としての良性妬みに着目した研究でも、良性妬みを抱きやすい者は、種々のパフォーマンスにおける目標を高く掲げる傾向にあり、その結果として、幅広い年齢層が参加するマラソン競技 (Lange & Crusius, 2015) や、大学生が受講する教養科目の試験 (澤田・藤井, 2016) の成績が向上することも示されている。

ただし、ポジティブな帰結をもたらす妬みが存在するとしても、相手の水準に到達できていない自分に焦点が当たる以上、妬み状況では、少なからず不快さを経験せざるを得ない。妬みは、他者もしくは他の集団が望ましい (しかも、自分には欠けている) 所有を享受していることを知ることで生じるものであって、主観的に不快で、敵意、恨みのような苦痛に満ちた感情として経験されると考えられているからだ (Parrott, 1991; Smith & Kim, 2007)。また、これは悪性妬みに限ったことではなく、良性妬み状況でも、相手が享受している有利さに痛みと不満が抱かれる (Van de Ven et al., 2009)。したがって、妬みによって産出される行動については、通常の動機づけとは異なる文脈、すなわち「痛み」を中心に論じる必要があるだろう。

事実、関心が類似している他者との上方比較をさせると、疼痛系の活動が活発になることが明らかにされており (Takahashi, Kato, Matsuura, Mobbs, Suhara, & Okubo, 2009)、妬みに苦痛が伴うことは間違いない。そのため、こうした痛みを和らげるために、妬みとそれに伴う行動が存在するとみなす立場もある (Craig, 2003; Tai, Narayanan, & McAllister, 2012)。たとえば、Craig (2003) は、身体的な苦痛と同じく、恒常性の維持のために生じる感情として妬みを捉えている。

これまで述べてきたように、妬みは古くから議論されてきた概念であり、多くの研究者が種々の報告をしているにもかかわらず、その理論については、必ずしも一致していない。こうした状況にあって、Lange, Weidman, & Crusius (2018b) は、これまでの研究を、大きく3つの理論に整理している (Figure 1)。すなわち、悪性妬み理論 (Malicious Envy Theory)、双数妬み理論 (Dual Envy Theory)、痛み理論 (Pain Theory of Envy) である。

¹ 羨むとは「人の様子を見て、その人のようにありたいと思う」であるのに対し、妬むとは「うらみや憎む」ことを意味する (新村, 2008)。このため、羨みは良性妬み、妬みは悪性妬みにそれぞれ対応する言葉と考えられる (澤田, 2010; 澤田・藤井, 2016)。

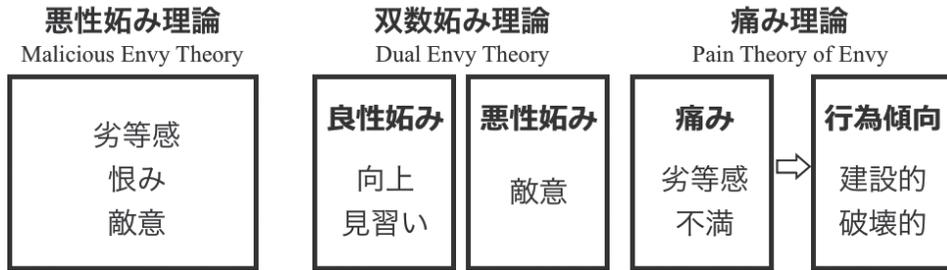


Figure 1. 従来の妬みに関する理論 (Lange et al. (2018b) より作成)

悪性妬み理論 優れた他者との比較から引き起こされる妬みを、複数の要素から構成される単一の概念と捉えるのが悪性妬み理論である。この理論では、劣った自分に対する劣等感と、優れた他者に対する恨みと敵意という3つの要素が妬みの中核とみなされる。また、こうした要素を備えた妬みは、本来の妬み (envy proper) とも呼ばれる (Smith & Kim, 2007)。Lange et al. (2018b) のメタ分析でも、悪性妬み理論に位置づけられる先行研究には、もれなく劣等感、恨み、敵意の要素が見てとれるという²。

悪性妬み理論の範疇で理解できる概念に、ドイツ語でシャーデンフロイデ (schadenfreude) と呼ばれるポジティブ感情がある。たとえば、妬ましい人物が不幸になると、それを見聞きしたときの喜びが強まることが知られている (澤田, 2008; Sawada & Hayama, 2012; Smith, Turner, Garonzik, Leach, Urch-Druskat, & Weston, 1996; Van Dijk, Ouwerkerk, Goslinga, Nieweg, & Gallucci, 2006)。こうした喜びは、当該の他者には相応しくないと思いき幸せが、後続の相応しい不幸によって是正されたとみなされるために生じると考えられており (Smith, 2013 澤田訳 2018)、とりわけ悪性妬みによって引き起こされやすいことが明らかにされている (Van de Ven, Hoogland, Smith, Van Dijk, Breugelmans, & Zeelenberg, 2015)。

双数妬み理論 妬みは正負両面の多様な特徴を有するとの指摘もあり (Parrott & Smith, 1993)、悪性妬み理論のように、妬みを単一の概念として扱うには限界もある。そこで、妬みにネガティブな形態とポジティブな形態、すなわち悪性妬みと良性妬みを想定するのが双数妬み理論である。この理論は、妬みの帰結として、パフォーマンスの向上のようなポジティブな機能に着目したものであり、日本語で言うところの「羨み」

² ただし、Lange et al. (2018b) は、悪性妬み理論に該当する先行研究においては、悪性妬みだけではなく良性妬みに相当する要素も散見される点を踏まえて、良性妬みの要素も含んだ包括的な理論として悪性妬み理論を捉えている (Figure 2参照)。

を悪性妬みの亜類型（サブタイプ）として良性妬みに位置づけたアプローチともみなせる（澤田, 2010）。悪性妬みとは別の感情概念として、自己向上や見習い（emulation）のような前向きな行動を導く良性妬みを想定している点で、悪性妬み理論とは区別される（Lange et al., 2018b; Smith & Kim, 2007）。

本邦でも、高橋（1987）は、羨みに敵意という成分が含まれているか否かを規準として、敵意が含まれていない羨みを「単純羨望」、敵意が含まれている羨みを「複雑羨望」と呼んで区別している。また、澤田（2005）は、感情語を用いた分析から、小中学生の経験する妬みは、苦痛感情、欠乏感情、敵対感情という3つの側面から理解できることを示しており、良性妬みには欠乏感情が、悪性妬みには敵対感情がそれぞれ対応すると考えられる。

痛み理論 双数妬み理論では、妬みという同一の概念が正反対の行動をもたらすという点で、妬みの光と闇の側面が網羅されている。しかし、妬みが相反する行動を引き起こす理由については、妬み自体を類型化するだけでは首尾良い説明ができない。その鍵を握るのが、妬みにおける「痛み」の存在である。小中学生の妬みにおいては、痛みに類する苦痛感情が加齢に伴い高まることが確認されており、妬みに由来する行動が生産的にも攻撃的にもなりえる可能性が示されているが（澤田, 2005）、そもそも妬みが正負両面の行為をもたらすのは、妬みという名の痛みを軽減させようとする目的があるからではないか、という見解がこれに当たる。

この理論では、妬みによって生じる行動は、社会的な状況下で生じる苦痛を和らげる効果を有すると考える。Tai et al. (2012)によると、妬みの痛みは、脅威志向（threat-oriented）もしくは挑戦志向（challenge-oriented）という2種類の行為傾向と結びつくという。妬み状況が脅威であれば、他者には敵意を抱き、破壊的な行動がもたらされる（Cohen-Charash & Mueller, 2007; Vecchio, 1997）。一方、挑戦とみなされると、妬ましい相手のレベルまで到達できるように自分を引き上げようとする（Van de Ven et al., 2009）。痛み理論における脅威志向は悪性妬み、挑戦志向は良性妬みにそれぞれ対応する概念であるものの、両者はあくまで痛みに基づいて生じやすい行為に位置づけられる。

痛み駆動双数妬み理論 Lange et al. (2018b) は、これまでの研究者が提案してきた妬みの全ての要素を網羅するように項目を収集して調査を実施し、最終的に3つの下位尺度（痛み、良性妬み、悪性妬み）からなる痛み駆動双数妬み（Pain-driven Dual Envy: 以下PaDEとする）尺度を作成した。そして、従来の妬み理論を統合した痛み駆動双数妬み理論（PaDE理論）を提唱し、達成動機や達成目標との関連性の確認や、妬み研究のメタ分析などを通じて、その妥当性や説明力の高さを主張している。この理論では、行為傾向としての状態的な良性妬みと悪性妬みが、痛みによって駆動すると考えられている。

本研究の目的 PaDE理論の適切さに関する検証は、アメリカ人とドイツ人を対象としたオンライン調査に基づいて行われたものであり、日本人にもPaDE理論が最適であると再現されるかは定かではない。そこで本研究では、日本人の大学生を対象としたオンライン調査を通じて、PaDE理論のモデル検証の追試を目的とする。妥当性の検証については、Lange et al. (2018b) の研究3にならい、達成動機尺度を用いる。双数妬み理論に基づく特性的な妬みを用いた研究では、良性妬みと達成動機の下位概念である達成欲求、悪性妬みと失敗恐怖との間にそれぞれ正の関連が確認されている (Lange, Crusius, & Hagemeyer, 2016)。一方、状態的な妬みは、良性・悪性のいずれも達成動機と関連していなかった (Lange et al., 2018b)。本研究では、こうした達成動機と妬みとの関連性の有無が再現されるかも検討する。また、良性もしくは悪性妬みを抱きやすい者は、それぞれに対応した状態妬みも高いと予想されるため、達成動機に加えて、特性妬みとの関連も確認することとした。さらに、特性妬みから、痛みによって双数妬み(行為傾向)の駆動に至る過程についても検討する。具体的には、PaDE理論で想定されている状態的な妬みの痛みによる双数妬みの駆動が、特性妬みによって調整されるかを明らかにする。

方 法

調査参加者 東京都内の私立大学に通う女子大学生159名が調査に参加した。平均年齢は19.59歳 ($SD = 1.23$) であった。

材料 本研究では、以下の尺度から構成されたオンライン調査を実施した。

達成動機尺度 Lange et al. (2018b) にて使用された達成動機尺度 (Achievement Motives Scale; Lang & Fries, 2006) の邦訳版 (光浪, 2010) を使用した。達成欲求³ (「自分の能力をテストすることができる状況に興味がある」など5項目) と失敗恐怖 (「成功するという確信がもてない場合には、何をするにも不安になる」など4項目) の2つの下位尺度で構成され、「1: 全く当てはまらない-4: 非常に当てはまる」の4件法で回答を求めた。

日本語版PaDE尺度 悪性妬み理論、双数妬み理論、痛み理論を統合した妬みを測定するために、Lange et al. (2018b) のPaDE理論に基づく状態妬み尺度 (以下PaDE尺度とする) の全11項目を翻訳して使用した⁴。翻訳に際し、原著者から翻訳の許可を得た

³ Lang & Fries (2006) の下位尺度名は「hope for success」であり「成功願望」とも訳出されている (田中・山内, 2000) が、光浪 (2010) にならい、本研究では「達成欲求」とした。

⁴ Lange et al. (2018b) の第一著者 (Jens Lange氏) より尺度の翻訳許可を得た際に、OSF (Open Science Framework) に掲載されている項目 (Lange, Weidman, & Crusius, 2018a) を推奨されたため (J. Lange, personal communication, May 17, 2018), 本研究ではそれらを翻訳して用いることとした。

後に、第一著者および第三著者が独立して翻訳し、日本語版の候補を絞り込んだ。続いて、本研究の目的を知らない第三者により英語に逆翻訳された全ての項目について、原著者に原義と相違ないかの確認を求めた⁵。Table 1には、下位尺度名、その構成要素と項目が示されている。「1: 全く当てはまらない-7: 非常に当てはまる」の7件法で回答を求めた。

Table 1
 PaDE理論に基づく状態妬み尺度（痛み、良性妬み、悪性妬み）の構成

下位尺度	構成要素	項目
痛み	拘泥	P1. 私は、苦しめられたと感じた（私は、煩わされたと感じた ⁶ ） （I felt tormented.）（Alternative: I felt bothered.）
	劣等感	P2. 私は、不十分だと感じた （I felt inadequate.）
		P3. 私は、気が滅入った （I felt depressed.）
良性妬み	願望	B1. 私は、Xへの強い切望を感じた （I felt deep longing for X.）
	向上の 動機づけ	B2. 私は、まさにそのXを自分も手に入れるべく、より努力したかった （I wanted to work harder to also obtain exactly X.）
		B3. 私は、同様に揃ってXを手に入れるべく、計画を立てたかった （I wanted to devise a plan to obtain X as well.）
	見習い	B4. その人は、まるで彼ないし彼女のようになる意欲を抱かせた （The Person motivated me to become just like him/her.）
悪性妬み	コミュニ ケーション	M1. 私は、誰かにその人についての愚痴をこぼしたかった （I wanted to complain to someone else about the Person.）
	特定の他者 への攻撃	M2. 私は、その人に対する敵意を抱いた （I felt hostile towards the Person.）
		M3. 私は、その人がXを失ってしまうように、密かに願った （I secretly wished that the Person would lose X.）
	行き場の ない攻撃	M4. 私は、憎しみを感じた （I felt hatred.）

注) Lange et al. (2018a) に準拠して作成。

⁵ 原著者が、逆翻訳された項目のニュアンスが原尺度のそれと食い違っていないと判断するに至るまで当該の作業を繰り返し、日本語版PaDE尺度の最終案について承認を得た（J. Lange, personal communication, August 9, 2018）。

⁶ 本研究では、当該の代替項目は用いられなかった。

日本語版BeMaS Lange & Crusius (2015) のBenign and Malicious Envy Scale (以下BeMaSとする)の邦訳版(澤田・藤井, 2016)を使用した。双数妬み理論に基づく特性としての良性妬み(「他の人たちの優れた成果に, 私も追いつこうと努力する」など5項目)と悪性妬み(「羨ましく思える人たちに対して, 私は悪意を感じる」など5項目)の2つの下位尺度から構成され, 「1: 全く当てはまらない-6: とても当てはまる」の6件法で回答を求めた。

手続き 調査は, 2018年10月に行われた⁷。大学の講義中に, 授業時間外でのオンライン調査への参加協力を要請した。参加方法や注意事項が記された依頼文書を配付して調査協力者を募った。書面には, 参加は任意であること, 随意に回答を中断する権利があること, 匿名による回答であること, 成績とは無関係であることなどが明記されていた。

調査参加への同意取得後, 参加者に性別, 年齢, 達成動機尺度への回答を求めてから, 最近経験した妬み(羨み)に関する状況を1つ想起させた⁸。その際, 本研究ではオンライン調査における努力の最小限化(Satisfice)傾向を検出するために, Oppenheimer, Meyvis, & Davidenko (2009)によるIMC (Instructional Manipulation Check)に基づく設問を兼ねた教示を用いた⁹。また, 当該の状況想起を促すため, Roseman, Wiest, & Swartz (1994)を参考にした項目を設けた。具体的には, 羨ましかった人物および対象を自由記述で簡潔に記入させてから, PaDE尺度の項目への回答を求めるという手続きをとった。なお, 一部の項目に対する補足説明として「文中の『その人』とは, あなたが思い出した人物, 『X』とはあなたが羨ましいと感じた点をそれぞれ意味します」と教示した。最後に日本語版BeMaSへの回答を求めた。全ての項目への回答が完了すると, デブリーフィング画面が表示され, 本調査の目的が文章で伝えられた。その際, 調査結果に関心のある希望者には, 個人が特定されずに結果の一部を送付できることも明示し, 任意でメールアドレスの登録を求めた。

結 果

調査協力に同意したのは159名であったが, 7名はすべての質問項目に回答しなかったため, 分析から除外した。また, 妬みの状況想起を兼ねたIMC設問において, 呈示された選択肢を選んで努力の最小限化が検出された30名も分析からは除外した。そのため,

⁷ 学習院女子大学研究倫理委員会の審査を受けている(2018年9月20日判定, 2018年10月5日承認)。

⁸ 「envy」の訳出に際しては, 日本語版BeMaSの翻訳手続き(澤田・藤井, 2016)を踏襲し, 字義的にネガティブなニュアンスが強い「妬み」ではなく「羨み」を用いた。

⁹ 教示は以下の通りであった。「最近, あなたが羨ましいと感じた状況をひとつ思い出してください。目を閉じて, できる限りハッキリと想像するように心がけてください。その時の状況を思い描いたら, 下記の『はい』も『いいえ』も選ばずに次のページへお進みください」。

実際に分析対象となったのは122名で、平均年齢は19.67歳 ($SD = 1.26$) であった。なお、14名の参加者については、最後まで質問項目に回答しなかったために、データに欠測が生じていた。この14名は分析対象に含め、欠測値は完全情報最尤推定 (full-information maximum likelihood) 法により処理を行った。

モデル比較 妬みに関する4つの理論のうち、どれが最も適切であるかについて、確認的因子分析を利用することで検討した。具体的には、各理論に基づいたモデル (Figure 2) をデータに当てはめて、モデル適合度を比較することで検討した。確認的因子分析は、オープンソースの統計ソフトウェア環境であるR 3.4.4上で、lavaanパッケージを利用して行った。

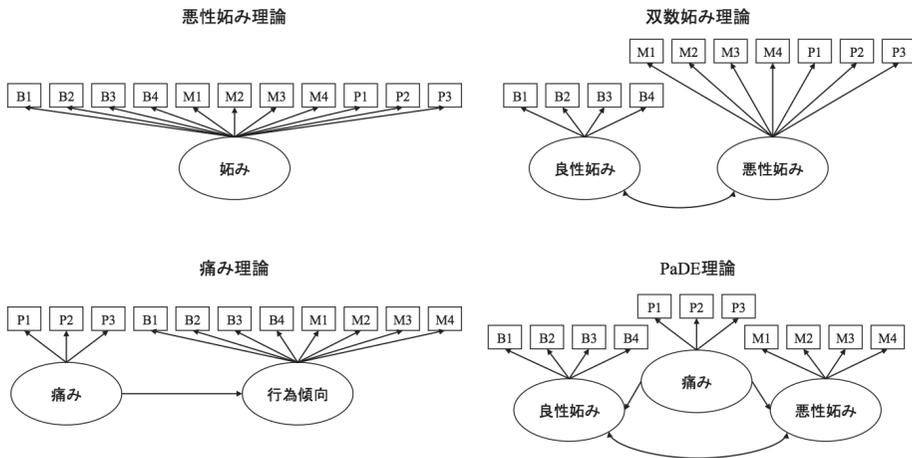


Figure 2. 本研究で比較した4理論の測定モデル (Lange et al., 2018b)

分析の結果、情報量規準であるAICとBICで比較した場合、PaDE理論に基づいたモデルのデータに対する当てはまりが最も良かった (Table 2)。また、Hu & Bentler (1998) によれば、CFIとTLIは0.95以上、SRMRは0.08以下、RMSEAは0.06以下であれば、モデルは十分に適合していると判断できる。この基準に照らした場合、PaDE理論に基づいたモデルのみが、許容できる適合度を示しているといえる¹⁰。さらに、PaDE理論に基づいたモデルについて、痛みと良性妬み ($b = 0.41, SE = 0.14, b^* = .38, p < .01$)、痛みと悪性妬み ($b = 1.70, SE = 0.36, b^* = .86, p < .01$) の間にそれぞれ有意な正の関連がみられた。これらの結果はLange et al. (2018b) で得られた結果と同一であり、本研究においても、PaDE理論が最も適切であることが示唆された。ただし、Lange et al. (2018b)

¹⁰ IMC設問でSatisfice傾向が検出された参加者30名を含めて分析した場合でも、PaDE理論が最も適切であることが示唆されている (Table A1参照)。

とは異なり、良性妬みと悪性妬みの誤差間には有意な負の相関がみられた ($r = -.38, p < .05$)。

Table 2
各モデルの適合度指標

	CFI	TLI	SRMR	RMSEA [90% CI]	AIC	BIC
悪性妬み理論	.747	.684	.131	.170 [.145, .196]	4767.040	4855.550
双数妬み理論	.910	.885	.088	.102 [.073, .131]	4679.061	4770.254
痛み理論	.763	.697	.131	.167 [.141, .193]	4759.184	4850.377
PaDE理論	.944	.925	.074	.083 [.049, .114]	4662.692	4759.249

BeMaSおよび達成動機尺度の確認的因子分析 BeMaSと達成動機尺度について、先行研究と同じ因子構造がみられるかを確認的因子分析によって検討した。その結果、BeMaSについては、CFI = .945, TLI = .927, SRMR = .065, RMSEA = .087 (90% CI [.051, .121]), 達成動機尺度については、CFI = .979, TLI = .971, SRMR = .047, RMSEA = .045 (90% CI [.000, .089]) であり、いずれも十分な適合度が確認された。

記述統計量と ω 係数、下位尺度間の関連 各下位尺度の記述統計量と信頼性係数の推定値である ω 係数、下位尺度間相関係数をTable 3に示す。 ω 係数は、R 3.4.4上でpsychパッケージの関数omega()を利用して算出した。 ω 係数の値から、いずれの下位尺度も信頼性は許容可能と判断することができる。

Table 3
各変数間の相関係数および記述統計量 ($N = 122$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	ω	1	2	3	4	5	6
1. 状態的な良性妬み	4.03	1.54	.74						
2. 状態的な悪性妬み	2.66	1.85	.90	.12					
3. 状態的な痛み	3.69	1.58	.70	.36**	.64**				
4. 特性的な良性妬み	4.10	1.04	.87	.36**	-.05	.00			
5. 特性的な悪性妬み	2.67	1.18	.87	.08	.65**	.33**	-.08		
6. 達成欲求	3.10	0.56	.80	.16	.02	.06	.33**	-.09	
7. 失敗恐怖	3.19	0.63	.77	-.13	.15	.24*	-.16	.29**	-.10

** $p < .01$, * $p < .05$

状態妬みと達成動機の関連について、痛みと失敗恐怖の間にのみ、有意な正の相関がみられた。これらの結果はLange et al. (2018b) の知見と同一である。また、状態妬みと特性妬みの関連について、良性妬み同士、悪性妬み同士の間には、それぞれ有意な正の相関がみられた。ただし、痛みと特性妬みの関連について、痛みと良性妬みの間には

有意な相関がみられなかった¹¹。

特性妬みと達成動機の関連については、良性妬みと達成欲求、悪性妬みと失敗恐怖の間に、それぞれ正の関連がみられた。良性妬みと失敗恐怖の間に負の相関がみられなかった点を除けば、これらの結果はLange et al. (2016) の報告と一致している。

状態妬みに対する達成動機の効果 達成動機と状態妬みの関係について検討するために、達成欲求と失敗恐怖を独立変数、良性妬みと悪性妬みをそれぞれ従属変数とする重回帰分析を行った。分析の結果、良性妬みと悪性妬みのいずれを従属変数とした場合にも、達成欲求と失敗恐怖の偏回帰係数は有意でなかった (Table 4)。これらの結果は、Lange et al. (2018b) の知見と一致するものである。

Table 4
 状態妬みに対する達成動機の効果

	状態的な良性妬み				状態的な悪性妬み			
	<i>b</i>	<i>SE</i>	95% CI	<i>b</i> *	<i>b</i>	<i>SE</i>	95% CI	<i>b</i> *
達成欲求	0.43	0.28	[-0.11, 0.97]	.16	0.12	0.33	[-0.53, 0.77]	.04
失敗恐怖	-0.27	0.23	[-0.72, 0.18]	-.11	0.45	0.28	[-0.10, 0.99]	.15

状態妬みに対する特性妬みと痛みの効果 特性妬みと状態妬みの関連、および痛みによる状態妬みの駆動が特性妬みによって調整されるかについて、特性妬みと痛みを独立変数、状態妬みを従属変数とする重回帰分析を行うことで検討した。特性妬みによる調整効果については、特性的な良性妬みと状態的な痛みの積、特性的な悪性妬みと状態的な痛みの積を交互作用項として独立変数に加えることで検討した。なお、多重共線性の問題を回避するために、交互作用項については、平均偏差の積を分析に用いた (Aiken & West, 1991)。

分析の結果をTable 5に示す。状態的な良性妬みを従属変数とした場合には、特性的な良性妬みと状態的な痛みの偏回帰係数が有意であり、有意な調整効果はみられなかった。一方で、悪性妬みに関しては、特性的な悪性妬みと状態的な痛みに加えて、有意な調整効果がみられた。そこで、単純傾斜分析 (simple slope analysis) を行った。状態的な悪性妬みに対する特性的な悪性妬みと状態的な痛みの交互作用をFigure 3に示す。状態的な悪性妬みが痛みによって駆動されるということは一貫しているものの、その傾向は特性的な悪性妬みの高い者に顕著であった。特性的な悪性妬み得点が平均値±1標準偏差である場合の痛みにかかる偏回帰係数を推定した結果、状態的な悪性妬みと痛み

¹¹ 記述統計量や信頼性、下位尺度間相関に関して、IMC設問にてSatisfice傾向が検出された参加者を含めた分析でも同様の結果が得られた (Table A2参照)。ただし、相関係数の値自体はほとんど同じであるものの、サンプルサイズの問題もあり、一部で有意な相関がみられた。

の正の関連は、特性的な悪性妬みの高い者ほど強かった（悪性妬み高: $b = 0.70, p < .01$; 悪性妬み低: $b = 0.41, p < .01$ ）。

Table 5
状態妬みに対する特性妬みと痛みの効果

	状態的な良性妬み				状態的な悪性妬み			
	<i>b</i>	<i>SE</i>	95% CI	<i>b</i> *	<i>b</i>	<i>SE</i>	95% CI	<i>b</i> *
(a) 状態的な痛み	0.36**	0.09	[0.20, 0.53]	.37	0.56**	0.07	[0.41, 0.70]	.47
(b) 特性的な良性妬み	0.52**	0.12	[0.28, 0.77]	.35	0.01	0.10	[-0.20, 0.21]	.00
(c) 特性的な悪性妬み	-0.04	0.12	[-0.28, 0.20]	-0.03	0.72**	0.10	[0.52, 0.91]	.46
(a) × (b)	-0.05	0.07	[-0.19, 0.10]	-0.05	0.02	0.06	[-0.10, 0.15]	.02
(a) × (c)	0.03	0.07	[-0.12, 0.17]	.03	0.12*	0.06	[0.00, 0.24]	.12

** $p < .01, * p < .05$

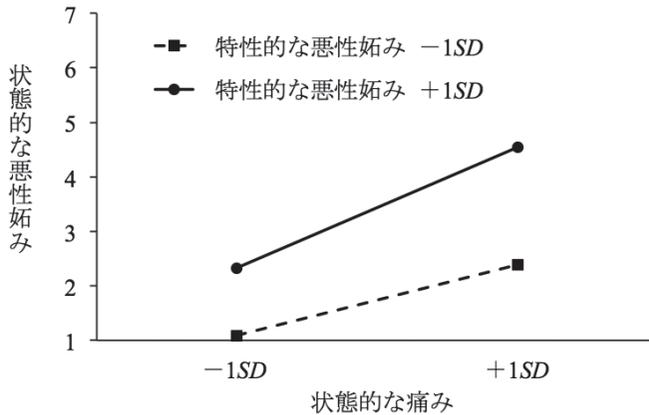


Figure 3. 状態悪性妬みに対する痛みと特性悪性妬みの交互作用効果

考 察

日本語版PaDE尺度の信頼性・妥当性 日本語版PaDE尺度を作成し、悪性妬み理論、双数妬み理論、痛み理論、PaDE理論の4つのモデルを比較するために行われた確認的因子分析の結果、PaDE理論が最も良好であった。下位尺度の ω 係数は全て.70を超えており、一定の内的一貫性を有していることが確認された。下位尺度間の相関については、もれなく正の関連が認められた。これらの結果は Lange et al. (2018b) の研究3で報告された相関 ($r = .12 - .52, ps < .05$) とも類似していたが、本研究では、良性妬みと悪性妬みの相関に限り有意ではなかった。特性的な妬みについては、良性妬みと悪性妬みに関連がないことが確認されており (Lange & Crusius, 2015; 澤田・藤井, 2016)、本研究

から、状態的であっても両者が独立した概念であることが示唆された。また、特性妬み (BeMaS) と状態妬み (PaDE尺度) の関連では、同じ概念同士に有意な正の相関が認められた。これは予測と一致する結果であり、PaDE尺度の収束的証拠の1つといえる。

以上の通り、本研究ではLange et al. (2018b) のPaDE理論が日本人でも再現されただけでなく、その傍証として双数妬みにおける特性妬みと状態妬みの対応関係も確認された。また、PaDE理論における3つの要素は、日本の小中学生を対象に明らかにされている妬みの3側面 (苦痛感情、欠乏感情、敵対感情) とも符合しており、大学生だけではなく児童生徒への適用可能性も示唆された。ただし、本研究は調査対象者が女子大学生に限定されたものであり、PaDE理論の再現性に関する検討の余地は多分に残されている。日本人の大学生における特性妬みについての性差は報告されていないもの (澤田・藤井, 2016)、男性および幅広い年齢帯を対象とした検証が急務といえよう。

なお、さらなるモデル検証の際に留意すべき点として、性別や年齢だけではなく、状態妬みの測定時に用いる教示の問題も挙げられる。Lange et al. (2018b) は、ドイツ人を対象とした調査 (研究4) において、妬み状況を想起させる言葉として、beneiden (良性妬み) と missgönnen (悪性妬み) という2語を用いて検討している。その結果、それぞれの言葉に対応する状態的な双数妬み尺度の平均値は高くなる一方で、痛み尺度にはこうした変化が見られなかった。Lange et al. (2018b) は、これらを状態妬みが良性妬み、悪性妬み、痛みという3つの要素からなる証拠の1つとみなしている。本研究では「羨ましい」状況の想起を求めたが、日本人にPaDE理論が適用されるのかを明らかにするためには、「妬ましい」状況の想起とも比較して、Lange et al. (2018b) と同様の結果が得られるかどうかを確認しておく必要がある。

達成動機と双数妬み 相関分析および重回帰分析の結果、達成動機の下位尺度 (達成欲求と失敗恐怖) は、状態的な良性妬みと悪性妬みに影響を及ぼしていなかった。同様の知見を得たLange et al. (2018b) は、特性妬みを用いた先行研究 (Lange et al., 2016) において、達成欲求と良性妬み、失敗恐怖と悪性妬みとの間に、それぞれ正の関連が確認されていることに言及し、達成動機との関連は特性的な双数妬みに限った現象ではないかと述べている。

Lange et al. (2018b) の研究4では、達成動機と状態妬みの関連性が薄かったという結果 (研究3) を受けて、達成目標と状態妬みの関連も検討されている。達成目標理論 (achievement goal theory) では、人は自らの有能さを確認しようと動機づけられていると考える (Dweck & Leggett, 1988)。そして、この理論では、自身の能力の伸長に重きを置く習得目標 (mastery goal) と、他者と比較して自身がよい成績を修められるか、あるいは他者より悪い成績を取らないで済むか、という点に重きを置く遂行目標 (performance goal) が想定され、これらの習得・遂行目標における有能さの比較基準 (自己か他者か) を、有能さの価 (valence) という観点から接近-回避 (正-負) の軸

を含めて分類されている (Elliot & McGregor, 2001)。Lange et al. (2018b) は、状態妬みに影響を及ぼすのは遂行目標ではなく習得目標であり、習得接近目標は良性妬みを高めるとともに悪性妬みを低めるが、習得回避目標には悪性妬みと痛みの両方を高める効果があることを報告している。このような知見を考慮すれば、日本人を対象とした PaDE理論に基づく研究でも、達成目標、とりわけ習得目標に焦点を当てた検討が求められる。

妬みの痛みによる駆動 Uchida & Kitayama (2009) が報告しているように、日本人が考える幸せは妬みと関連している。また、日本の平等主義がいじめをもたらしているという論考 (土居・渡部, 1995) も踏まえるなら、幸せと妬みの連結は、誰かに良性妬みを抱かれて自分が目標になることを気にするというよりは、むしろ悪性妬みの矛先が自分となり、何らかのトラブルに巻き込まれることを恐れてのものと考えられる。すなわち、状態としての悪性妬みの発動が懸念されているといえるが、PaDE理論では、こうした行為を直接引き起こすのが状態としての妬みの痛みと考えている。したがって、痛みを左右する要因が何か明らかにされれば、妬みが行為傾向として顕現する過程を理解する一助となるだろう。

本研究において、状態的な痛みと関連していたのは、特性的な悪性妬みであった¹²。また、特性的な妬みによる調整効果について分析した結果、悪性妬みを抱きやすい者ほど、痛みによる状態的な悪性妬みの駆動が顕著であった。これらの結果から、悪性妬みを抱きやすい者は、種々の妬み状況で痛みを経験しやすく、それに基づいて敵意や憎しみを体験する傾向にあることが明らかになった。すなわち、悪性妬みが高い人ほど、状態的な痛みが破壊的行為に直結しやすいと考えられる。換言すれば、「痛みから破壊へ」という関係は、特性的な悪性妬みによって調整されているとみなせる。ただし、本研究は100名程度を対象とした横断調査によって得られたデータについて、個人間相関に基づいて分析を行ったものであることから、こうした解釈には慎重を要する。今後は、より多くのサンプルを対象に縦断調査を行い、状態的な痛みと悪性妬みの個人内での関連が、特性的な悪性妬みの高い人ほど強いかについて分析を行うなど、より詳細な検討が重要な課題といえよう。

いじめと妬み 最後に、PaDE理論を日本人に当てはめた研究の方向性について述べる。妬みの痛みという概念を用いれば、日本に特徴的な現象を首尾よく説明できる可能性が考えられる。その一つが、問題視されて久しい「いじめ」である。

¹² 一方、特性的な良性妬みは痛みと関連していなかった。「他の人たちの優れた成果に、私も追いつこうと努力する」などからなる良性妬みの項目は、妬みを感じた直後の痛みというよりは、優れた他者を刺激として前向きに行動するような意味合いを有している。したがって、こうした内容から測定される良性妬みは、時間をかけて徐々に痛みを緩和していく志向ともみなせるため、記憶に新しい痛みの経験とは結び付きにくかったのではないかと推察される。

日本のいじめを理解する上で導出された文化・感情混合過程モデル(cultural-emotional entangled process model: Hitokoto & Sawada, 2016)では、妬みの背景に、文化的自己観や人間関係のあり方を想定している。そして、相互協調性、権力格差、人並み志向といった文化の様々な特徴が、双数妬み（特に悪性妬み）を介して、学校におけるいじめを見えにくくしていると考えられている。たとえば、悪性妬みは、自分より優れた他者を引きずり下ろそうとする感情であるが、学年や学級といった上下関係および内集団における自分の社会的立場をわきまえた行動が求められる文化的文脈で生じる場合、悪性妬みの矛先は、自分と類似した他者に向けられやすくなる。なぜなら、学校で制度上揃えられた年齢や、全体で歩調を合わせることを強いられる学業達成などによって、他者との類似性が必然的に目に付くようになるためである。はたして、文化的文脈の影響下で生じているがゆえに妬みが妬みとして顕現化されずに、悪性妬みによる攻撃は秘匿されてしまう。このような説明からも、妬みが転成し、人を傷つける様子が看取できる（Smith, 2013 澤田訳 2018）。今後、日本の文化的文脈にPaDE理論を適用することによって、日本人が抱く悪性妬みが、いじめに類するネガティブな行動の選択に至るメカニズムの解明が期待される。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Newbury Park: Sage.
- Cohen-Charash, Y., & Mueller, J. S. (2007). Does perceived unfairness exacerbate or mitigate interpersonal counterproductive work behaviors related to envy? *Journal of Applied Psychology, 92*, 666-680. doi: 10.1037/0021-9010.92.3.666
- Craig, A. D. (2003). A new view of pain as a homeostatic emotion. *Trends in Neurosciences, 26*, 303-307. doi: 10.1016/S0166-2236(03)00123-1
- 土居 健郎・渡部 昇一 (1995). いじめと妬み——戦後民主主義の落とし子—— PHP研究所
- Duffy, M. K., Shaw, J. D., & Schaubroeck, J. M. (2008). Envy in organizational life. In R. H. Smith (Ed.), *Series in affective science. Envy: Theory and research* (pp. 167-189). New York: Oxford University Press. doi: 10.1093/acprofoso/9780195327953.003.0010
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review, 95*, 256-273. doi: 10.1037/0033-295X.95.2.256
- Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001). A 2 × 2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology, 80*, 501-519. doi: 10.1037/0022-3514.80.3.501
- Gold, B. T. (1996). Enviousness and its relationship to maladjustment and psychopathology. *Personality and Individual Differences, 21*, 311-321. doi: 10.1016/0191-8869(96)00081-5
- Hill, S. E., DelPriore, D. J., & Vaughan, P. W. (2011). The cognitive consequences of envy: Attention, memory, and self-regulatory depletion. *Journal of Personality and Social Psychology, 101*, 653-666. doi: 10.1037/a0023904
- Hitokoto, H., & Sawada, M. (2016). Envy and school bullying in the Japanese cultural context. In R. H. Smith, U. Merlone, & M. K. Duffy (Eds.), *Envy at work and in organizations* (pp. 267-296). New York: Oxford University Press. doi: 10.1093/acprofoso/9780190228057.001.0001
- Hitokoto, H., & Uchida, Y. (2015). Interdependent happiness: Theoretical importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies, 16*, 211-239. doi: 10.1007/s10902-014-9505-8

- Hu, L., & Bentler, P. M. (1998). Fit indices in covariance structure modeling: Sensitivity to underparameterized model misspecification. *Psychological Methods, 3*, 424-453. doi: 10.1037/1082-989X.3.4.424
- Lang, J. W. B., & Fries, S. (2006). A revised 10-item version of the Achievement Motives Scale: Psychometric properties in german-speaking samples. *European Journal of Psychological Assessment, 22*, 216-224. doi: 10.1027/1015-5759.22.3.216
- Lange, J., & Crusius, J. (2015). Dispositional envy revisited: Unraveling the motivational dynamics of benign and malicious envy. *Personality and Social Psychology Bulletin, 41*, 284-294. doi: 10.1177/0146167214564959
- Lange, J., Crusius, J., & Hagemeyer, B. (2016). The evil queen's dilemma: Linking narcissistic admiration and rivalry to benign and malicious envy. *European Journal of Personality, 30*, 168-188. doi: 10.1002/per.2047
- Lange, J., Weidman, A. C., & Crusius, J. (2018a). PaDE state envy scale and translations. Retrieved from osf.io/x8b3t
- Lange, J., Weidman, A. C., & Crusius, J. (2018b). The painful duality of envy: Evidence for an integrative theory and a meta-analysis on the relation of envy and schadenfreude. *Journal of Personality and Social Psychology, 114*, 572-598. doi: 10.1037/pspi0000118
- McFarlin, D. B., & Blascovich, J. (1984). On the remote associates test (RAT) as an alternative to illusory performance feedback: A methodological note. *Basic and Applied Social Psychology, 5*, 223-229. doi: 10.1207/s15324834baspp0503_5
- 光浪 睦美 (2010). 達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響——認知的方略の違いに着目して——
教育心理学研究, 58, 348-360. doi: 10.5926/jjep.58.348
- 新村 出 (編) (2008). 広辞苑 第六版 岩波書店
- Oppenheimer, D. M., Meyvis, T., & Davidenko, N. (2009). Instructional manipulation checks: Detecting satisficing to increase statistical power. *Journal of Experimental Social Psychology, 45*, 867-872. doi: 10.1016/j.jesp.2009.03.009
- Parrott, W. G. (1991). The emotional experience of envy and jealousy. In P. Salovey (Ed.), *The psychology of jealousy and envy* (pp. 3-30). New York: Guilford Press.
- Parrott, W. G., & Smith, R. H. (1993). Distinguishing the experiences of envy and jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology, 64*, 906-920. doi: 10.1037/0022-3514.64.6.906
- Roseman, I. J., Wiest, C., & Swartz, T. S. (1994). Phenomenology, behaviors, and goals differentiate discrete emotions. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*, 206-221. doi: 10.1037/0022-3514.67.2.206
- 澤田 匡人 (2005). 児童・生徒における妬み感情の構造と発達の变化——領域との関連および学年差・性差の検討——
教育心理学研究, 53, 185-195. doi: 10.5926/jjep1953.53.2_185
- 澤田 匡人 (2008). シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響——罪悪感, 自尊感情, 自己愛に着目して——
感情心理学研究, 16, 36-48. doi: 10.4092/jsre.16.36
- 澤田 匡人 (2010). 妬みの発達
心理学評論, 53, 110-123.
- 澤田 匡人・新井 邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす, 妬み傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響
教育心理学研究, 50, 246-256. doi: 10.5926/jjep1953.50.2_246
- 澤田 匡人・藤井 勉 (2016). 妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか? ——良性妬みに着目して——
心理学研究, 87, 198-204. doi: 10.4992/jjpsy.87.15316
- Sawada, M., & Hayama, D. (2012). Dispositional vengeance and anger on schadenfreude. *Psychological Reports, 111*, 322-334. doi: 10.2466/16.07.21.PR0.111.4.322-334
- Schimmel, S. (1993). *Seven deadly sins*. New York: Bantam Doubleday.
- Schoeck, H. (1969). *Envy: A theory of social behavior*. New York: Harcourt, Brace & World.
- Smith, R. H. (2013). *The joy of pain: Schadenfreude and the dark side of human nature*. New York: Oxford University Press.
- (スミス, R. H. 澤田匡人 (訳) (2018). シャーデンフロイデ——人の不幸を喜ぶ私たちの闇—— 勁草書房)

痛み駆動双数妬み理論の再現性に関する検討
—日本人の大学生を対象にしたオンライン調査を通じて—

- Smith, R. H., & Kim, S. H. (2007). Comprehending envy. *Psychological Bulletin*, *133*, 46-64. doi: 10.1037/0033-2909.133.1.46
- Smith, R. H., Turner, T. J., Garonzik, R., Leach, C. W., Urch-Druskat, V., & Weston, C. M. (1996). Envy and schadenfreude. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *22*, 158-168. doi: 10.1177/0146167296222005
- Tai, K., Narayanan, J., & McAllister, D. J. (2012). Envy as pain: Rethinking the nature of envy and its implications for employees and organizations. *Academy of Management Review*, *37*, 107-129. doi: 10.5465/amr.2009.0484
- Takahashi, H., Kato, M., Matsuura, M., Mobbs, D., Suhara, T., & Okubo, Y. (2009). When your gain is my pain and your pain is my gain: Neural correlates of envy and schadenfreude. *Science*, *323*, 937-939. doi: 10.1126/science.1165604
- 高橋 由典 (1987). 羨望論 思想, *757*, 23-46.
- 田中 あゆみ・山内 弘継 (2000). 教室における達成動機, 目標志向, 内発的興味, 学業成績の因果モデルの検討 心理学研究, *71*, 317-324. doi: 10.4992/jjpsy.71.317
- Uchida, Y., & Kitayama, S. (2009). Happiness and unhappiness in east and west: Themes and variations. *Emotion*, *9*, 441-456. doi: 10.1037/a0015634
- 上野 雄己・陶山 智・小塩 真司 (2018). スポーツ競技者における競技種目と競技レベル, 妬み感情の関連——悪性妬みと良性妬みに着目して—— 感情心理学研究, *25*, 53-57. doi: 10.4092/jsre.25.3_53
- Van de Ven, N., Hoogland, C. E., Smith, R. H., Van Dijk, W. W., Breugelmans, S. M., & Zeelenberg, M. (2015). When envy leads to schadenfreude. *Cognition and Emotion*, *29*, 1007-1025. doi: 10.1080/02699931.2014.961903
- Van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2009). Leveling up and down: The experiences of benign and malicious envy. *Emotion*, *9*, 419-429. doi: 10.1037/a0015669
- Van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2011). Why envy outperforms admiration. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *37*, 784-795. doi: 10.1177/0146167211400421
- Van Dijk, W. W., Ouwerkerk, J. W., Goslinga, S., Nieweg, M., & Gallucci, M. (2006). When people fall from grace: Reconsidering the role of envy in schadenfreude. *Emotion*, *6*, 156-160. doi: 10.1037/1528-3542.6.1.156
- Vecchio, R. P. (1997). Categorizing coping responses for envy: A multidimensional analysis of workplace perceptions. *Psychological Reports*, *81*, 137-138. doi: 10.2466/pr0.1997.81.1.137
- Wert, S. R., & Salovey, P. (2004). A social comparison account of gossip. *Review of General Psychology*, *8*, 122-137. doi: 10.1037/1089-2680.8.2.122

付 録

Table A1
Satisfice傾向が検出された者を含めた分析における各モデルの適合度指標

	CFI	TLI	SRMR	RMSEA [90% CI]	AIC	BIC
悪性妬み理論	.743	.679	.123	.160 [.138, .183]	6063.313	6159.672
双数妬み理論	.907	.881	.087	.098 [.072, .123]	5966.116	6065.395
痛み理論	.773	.710	.123	.152 [.130, .176]	6046.493	6145.772
PaDE理論	.957	.942	.071	.068 [.036, .097]	5938.086	6043.205

Table A2
Satisfice傾向が検出された者を含めた各変数間の相関係数および記述統計量 (N = 152)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	ω	1	2	3	4	5	6
1. 状態的な良性妬み	4.07	1.48	.72						
2. 状態的な悪性妬み	2.71	1.82	.89	.14					
3. 状態的な痛み	3.67	1.54	.70	.35**	.56**				
4. 特性的な良性妬み	4.18	1.04	.87	.38**	-.02	-.03			
5. 特性的な悪性妬み	2.70	1.18	.87	.09	.68**	.32**	-.10		
6. 達成欲求	3.09	0.55	.79	.18*	.04	.08	.29**	-.06	
7. 失敗恐怖	3.14	0.60	.73	-.10	.11	.24**	-.17*	.21*	-.08

** $p < .01$, * $p < .05$

(本学准教授, 横浜国立大学准教授, 元ノーザンプリティッシュコロロンビア大学)